



たかはし かずひろ
高橋 和広 教授

～ 内分泌応用医科学分野 ～

講義題目

**神経ペプチド研究から
ジャーナル編集まで**

【略 歴】

- | | |
|--|--|
| 1983年 3月 東北大学医学部卒業 | 1998年 9月 東北大学医学部助教授 |
| 1983年 5月 財団法人竹田総合病院 | 1999年 4月 東北大学大学院医学系研究科助教授 |
| 1985年 5月 東北大学医学部附属病院 | 2005年 4月 東北大学医学部教授 |
| 1988年10月 Royal Postgraduate Medical School・
ハマースミス病院研究員 | 2008年 4月 東北大学大学院医学系研究科教授 |
| 1991年 1月 岩手県立宮古病院医長 | 2014年 4月 東北大学大学院医学系研究科保健学
専攻長（併任～2015年3月） |
| 1992年 5月 東北大学医学部助手 | 2024年 3月 退職 |
| 1996年 8月 東北大学医学部講師 | |

【研究業績等の紹介】

高橋和広教授は、1983年に東北大学医学部を卒業され、財団法人竹田総合病院内科および東北大学医学部附属病院第2内科にて臨床研修の後、1988年10月から英国のロンドン大学王立医学大学院（Royal Postgraduate Medical School、現インペリアルカレッジ）にて、Stephen R. Bloom 教授の指導の下、内分泌学、特に神経ペプチドや生理活性ペプチドの研究をされてきました。1990年に帰国後もペプチドの研究を続けられ、血管拡張性ペプチドのアドレノメデュリン、睡眠時無呼吸症候群におけるオレキシン、そして腎不全や糖尿病におけるウロテンシンIIの研究等、最先端の研究を推進されました。

インペリアルカレッジの内分泌代謝学研究室とは親密な関係が続けられ、2002年に同研究室から *Nature* 誌に報告された「消化管から分泌される PYY3-36 の食欲抑制作用」に関する論文 (Batterham et al. *Nature* 2002; 418:650-654)では、著者から謝辞 (Acknowledgement) を受けられました。また3名の日本人研究者をインペリアルカレッジに順次推薦し、国際的な研究の道筋を作られました。3名は帰国後には東北大学を含む大学において教授として活躍されることとなりました。

近年は、血圧制御に重要な作用を担っているレニンとその前駆体に対する受容体であるプロレニン受容体の研究を行い、細胞内小器官内の酸性化を担っている液胞型 ATP アーゼの機能維持に重

要な機能も担っているプロレニン受容体の発現抑制が、腫瘍細胞の増殖を顕著に抑制する事実を明らかにされました。

2001年には、世界的に著名な国際医学誌 *Peptides* の編集長である Abba J. Kastin 教授から編集委員 (Editorial Board) の要請を受けるとともに、2008年には仙台にて生理活性ペプチド国際シンポジウムを主催されました。2017年から4年間は *Peptides* の副編集長として国際的学術論文の出版に貢献されてきました。2021年からは3年間 *Tohoku Journal of Experimental Medicine* の編集長を務め、「新型コロナウイルス感染症」や「ウクライナのツイートの分析」等、社会的に大きな影響のある論文の出版に尽力されてきました。2023年には、日本内分泌学会第41回内分泌代謝サマーセミナーを宮城県松島町にて開催し、内分泌代謝学の基礎研究と応用研究の発展に貢献されました。